

# 積算四方山話①

野呂 幸一

公益社団法人日本建築積算協会 名誉会長

## 積算との出会い

私は、1964（昭和39）年4月、大阪の建設会社に入社した。1ヵ月余りの新入社員の研修後、配属先の発表があり、大阪の建築部積算課と言われた。

積算は初めて聞く言葉であり、一体何をすると  
ころなのかサッパリ分からなかった。

この年は、東京のオリンピックを秋に控え、東京は建設ラッシュで新入社員の多くは東京の現場へ行くことになっていた。私も入社に際し、東京の現場を希望していたので当然配属先は東京の現場と思っていた。

それが積算課だという、しかも大阪で勤務という  
ことで正に晴天の霹靂であった。

それ以来いつの間にか積算との付き合いが50年  
以上続き、人生の不思議さを感じている。

こんな私であるが、「積算四方山話」として、  
駄文を連載することになった。しばらくお付き合  
いいただければ幸いである。

## 新入社員の仕事

さて積算課に配属されると、まずソロバンの練習が始まった。積算にソロバンが必須だという。新入社員は、大卒、高卒合わせて5名いたが、各自に4級の問題集が与えられ3ヵ月間やれという。積算課には、50名ぐらいの社員がおり、みんながソロバンを片手に図面を睨み、計算書に何かを書いてはパチパチ弾いていた。当時は、コンピュータもなく、電卓さえもなかった。1年ぐらい経った頃、大きな電卓が1台配備されたが、使う人はいなかった。計算の主力は、何ととっても

ソロバンであった。

積算課の新入社員は、ソロバンの練習が午前で終わると、色々な雑用を命じられた。その一つに「図面汚し」があった。

当時は、指名を受けても工事の獲得を目指さない場合は積算を行わず、他社から入手した見積明細書を自社用書き直して提出していた。入札に際し提供された図面は返却するために、あたかも積算業務をしたかのように見せかける必要があり、そのために図面を汚していた。

この作業は、結構大変であった。工事によっては、200枚を超える図面もあり、これを1枚ずつ汚すのであるが、なかなかうまくいかない。手で擦って手垢を付けたら、皸くちゃにして伸ばしたり、折ったりして苦勞していると先輩が来て床に図面を置いて土足で踏めと言われた。成程やってみると結構汚れてそれらしくなった。

次は、現説（現場説明）に行けと言われた。

現説とは、工事の入札に際し、発注者が指名した業者に対して、工事について説明を行うものであるが、実際に工事を行う現地に行くことはあまりなかった。会議室などに指名を受けた業者が集められ、現場説明書と図面が渡された。現場説明書には、見積りの項目と提出日時を始め、工事場所や建物概要などが記載されていた。

新入社員が行く現説は、指名を受けても獲得の予定がない場合であり、図面と書類を持ち帰り、定型の報告書を作成すれば済んだ。初めは、先輩に連れて行かれたが、その後は一人で行くことが多くなった。

現説にも慣れてきた頃、ある相互銀行の本店ビル新築工事の現説があり、行ってこいと言われた。

一人で指定された相互銀行の会議室に行くと、すでに、7、8社、指名を受けた会社の担当者がいた。総勢20名ぐらいであったが、みなさん、私よりもずーっと年配であり、浅黒い精悍な顔つきでピシッとスーツを着こなしていた。定刻になると発注者から、今から現地を見てもらいますとの発言があり、いきなり私の会社の名前が呼ばれ、1号車に乗るように言われた。現地に行くのは初めてであった。

車は、数台外車が銀行の前に停まっており、それぞれ指定された車に乗り込んだ。

現地に着くと発注者側の担当者から説明があり、終わるとすぐに私の会社の名前を呼び「何か質問はありませんか」と聞かれた。私は、経験不足もいいところで何を聞いていいのかも分からず、「特に質問はありません」と答えるのみであった。

その後、また外車に乗り戻ることになったが、今度は、銀行の会議室ではなく大阪でも有名なホテルに連れて行かれた。案内された会場は、結婚式の披露宴会場のよう、丸いテーブルが10個ぐらい用意されており、白いテーブルクロスが掛けられていた。案内されると、私の席は一番前にあった。一同が席に着いた頃、司会者から開会の挨拶があった。続いて頭取の話があり、今回の工事にかかる意気込みが述べられた。

驚いたのはその後である。司会者から私の会社の名前が告げられ「それでは受注者を代表してご挨拶をいただきたい」と言うのではないか。

「えっ!!!?」

いつものように受注するつもりのない工事と思っていたのんびりしていた私は、突然の指名にすっかり動転してしまった。

他社の担当者は、一斉に私の方を見つめている。とりあえず立ち上がり、「ご指名ですので一言ご挨拶させていただきます。一生懸命やらさせていただきます」というのが精一杯であった。

その後、フランス料理のフルコースが出てきたが、味はサッパリ分からなかった。酒も口にした

が、酔いなどまったく感じなかった。

新入社員で2、3ヵ月しか経っていない者にとっては厳しい現実であったが、会社は、次から次へと試練を与えてきた。

ある日、課長から呼ばれた。「何でしょうか」と聞くと「解体工事の見積書を作ってもらいたい」と言う。「あのチョット待ってください。積算もできないのに無理ですよ」と言う。「生駒にある工場だが、解体屋が来るから現地と一緒に行き、解体屋の言う金額をメモしてくればいい。難しくないと」言われた。少しして、その解体屋が部屋に入ってきた。プロレスラーかと思うほど大きくてがっしりしているし、真っ黒に日焼けしてサングラスまでかけていて怖かった。

解体屋は、「車で行くから」と言う。会社を出るとクラウンエイトの新型車があった。解体屋は、目で後ろに乗れと言う。2時間近く後ろの席でじっとしていた。

目的の工場は、生駒山の山麓にあり、広い敷地に散在していた。工場に人影はなく、サングラスの解体屋は、建屋を次から次へと慣れた足取りでめぐり、建屋毎に金額を言った。

私は、手帳に建屋名と金額をメモした。敷地の奥に大きな木造の便所があった。大変汚く、異臭を放っていた。よく見ると便槽に蛆虫が群がっており、かなりの蛆虫が外まではみ出していた。解体屋は、「100万円」と言ったが、私は思わず「200万円、蛆が湧いているじゃないか」と大きな声を出してしまった。解体屋は、ニヤッと白い歯を見せて「いいでしょう」と言った。

帰社後、他の解体工事の見積書を見せてもらい、それに倣って見積書を作成した。解体工事は、建屋毎に一式の金額を入れて合計すれば済むため難しくなかった。木造の便所を200万円としたことは言うまでもなかった。

出来上がった見積書を課長に提出した時、何となく一人前になったような気がした。

こうして思いがけない積算課員としての社会人生が始まったのであった。